

留学報告書

2026年2月

立石 泰佳 (たていし やすか)

University College London

昨年の10月から今年の5月まで Harvard 大学の経済学部にて visiting PhD student として滞在しています。今回は主に UCL と Harvard の違いについてまとめてみたいと思います。

(1) 毎日の挨拶で天気の話をしな

あまりにも些末な点ですが、天気に対する感覚が違うというのが最初の驚きでした。ボストンの人もこちらは天気が悪いと言っているものの、来てみればすっきりと晴れている日も多く、ロンドンよりも冬は過ごしやすいと感じています。ロンドンでは冬に3週間ほど続けて一日中曇天だったり、陽が出たとしても一瞬だったり、とにかく暗いので、気温自体はボストンの方が低いのにロンドンの方が寒かったように感じてしまいます。また、ロンドンでは友人と毎日の挨拶で「今日も曇ってるね」「相変わらず暗い天気だね」「今日は久々に良い天気だね」などと天気について触れていたのですが、こちらで晴天の日に私がはしゃいで「今日は晴れているね！」と言っても反応が薄く、天気があまり日々の懸念事項でないように感じました（大雪など異常気象の日を除く）。今でもロンドンの友人と zoom で話すと how's weather? と開口一番に聞かれるので、これはイギリスの文化だったのかと思いました。

(2) セミナー・ワークショップの数が多い

Harvard ではゲストスピーカーを呼ぶセミナー（MIT と合同開催のことが多い）、主に PhD の学生が発表するワークショップが各フィールドごとにあります。また PhD 3 年目以降の学生がプロジェクトの進捗を早期からインフォーマルに相談する場としての advising group もあり、すべてに各フィールドの教員が参加しています。私は開発経済のセミナー・ワークショップ・advising group に加えて、国際経済や環境経済のワークショップにも顔を出しています。ワークショップでは複数の分野で発表できるので、一人が同じプロジェクトを何回も発表することもあります。UCL では学外スピーカーを呼ぶセミナーは同様にありますが、学生が発表する場は週1回の PhD workshop だけです。これは全分野で週1回なので発表枠も取りにくく、大抵は年に1回程度になってしまいます。学内での発表の場の多さは Harvard 特有らしいのですが、頻繁にフィードバックを貰える機会があるのはプロジェクトの進捗にメリハリをつけるためにも良いと思いました。また、近い分野の学生の発表を多く聞くこと自体学びになりますし、開発のグループだけで教員も含めてコミュニティ意識ができるので、話しやすくなるのも嬉しいです。私自身、今学期はそれぞれ異なるワークショップで4回発表予定です。スケジュールを決めるのが学期が始まる前なので、二学期間 visiting をすることにして良かったと思いました。

(3) フィールドワークをしている学生が多い

私は UCL で開発経済を専攻している中では珍しく、自分で予算を獲得してウガンダでフィールド調査を行っています。シニア教員とのプロジェクトでフィールドに行く人は少数いるものの、自分が PI としてプロジェクトをどう回せばいいのかについては参考にできる人がいないので常に手探りでした。しかし、Harvard では学内グラントが充実していることもあり、開発経済学の PhD 学生のうち 7 割近くが自身のプロジェクトで（シニア教員とではなく）フィールドワークをやっているという印象です。学内グラントだけでプロジェクトが完結する人もいれば、学内グラントで現地でのネットワーク作りやパイロット調査などを行った上で規模の大きな学外のグラントに出すという人もいます。Advising group ではフィールド調査を行う前の設計について相談している人も多く（私も自分の調査について相談しました）、細かい手続きのノウハウなども学生の間で活発に共有されていて、フィールドワークをするハードルが非常に低いと感じました。UCL では PhD の学生に研究費がほとんどなく、フィールドワークをしたければ学外のグラントに応募するしかありません。大学としての予算の潤沢さが学生の研究に直結しているのを目の当たりにして、衝撃でした。

Visiting PhD student という身分自体、何をするのか、何のためにするのかと言われると一言で説明するのは難しいところです。私は仲の良かった PhD の友人が Berkeley に visiting しているときに遊びに行き、UCL とは全く文化が違い学びが多いと楽しそうに語っていたのに惹かれ、自分もやってみたいと思いました。ヨーロッパの大学からアメリカに visiting する学生は一定数いますが、短期間の滞在で少ししか受け入れ教員に会えず、あまり意義を感じられなかったという話も聞きます。私も UCL の指導教員たちに不満があったわけではないので、visiting せずにロンドンに残った方がよかった、と思う可能性もありました。しかし、結果的には Harvard の受け入れ教員 2 人がとても面倒見が良く建設的なアドバイスをくれること、何より限られた期間で visiting の成果を得るために積極的に発表の機会を得て教員や学生と話さなければいけないと自分を鼓舞したことで、今のところ充実した時間を過ごすことができます。PhD 5 年目で毎年繰り返される日常が少しずつ停滞し、研究への漠然とした行き詰りを感じていた中、環境を大きく変えたことでとても良い刺激になっています。

Harvard では先学期は学期の途中からボストン／ケンブリッジを離れていた学生のデスクを使わせてもらい、今学期は自分のデスクを与えられ、とても良い研究環境です。また、UCL ではフィールドコースがあまりしっかりと組み立てられていなかったのので、都市経済と国際経済の授業を聴講しています。今までつまみ食いの的に学んできたことが有機的に繋がる感覚があり楽しいのですが、それ以上に自分はこの分野の知識が不足しているという苦手意識を少しずつ克服して、自信を持つ契機になりそうな気がしています。ロンドンで気軽に友人と話し、飲みに行っていた日々を懐かしく思いませんが、他の visiting student と仲良くなったり、日本人のコミュニティに呼んでもらったり、テニスの相手も見つけました。この機会をいただいた方々への感謝を忘れず 5 月末までの残された数か月間をしっかりと過ごしたいと思います。

ウガンダ渡航のあれこれ

昨年9月から10月、さらに今年の1月から2月まではウガンダに滞在し、フィールド調査の準備を進めてきました。昨年の渡航ではパイロット調査として調査員とともに企業を訪問してインタビューに同行し、調査の流れや質問票の内容を確認し、今年の渡航では本調査に向けての準備を整えました。

10月のパイロット調査は思い通りにいかないことの連続でした。調査対象企業はウガンダの行政データからサンプリングしているのですが、まず企業が見つからないという問題に直面しました。ウガンダでは住所が正確ではなく、google map もあまり当てになりません。また、行政データ上の住所（そもそもこれが正確ではない）から移転、または既に閉鎖している可能性も高いです。登録された電話でインタビューの依頼と正確な住所を聞いても不審に思われてすぐに切られてしまったり、アポイントメントの約束の日になって繋がらなかったりします。ウガンダでは個人が複数電話番号を持つことが多いのですが、行政手続き（特に税務署）に提出するのはサブの電話番号で、その番号が鳴ると徴税関係だと思われてしまうのです。また、企業に直接赴いて調査に応じてくれたとしても、途中でインタビューを打ち切れ、冷たい言葉を浴びせられたこともありました。洪水についての調査としてインタビューを依頼したものの、洪水のサプライチェーンへの影響を測るため取引先についての質問が多かったのが原因で、相手にも調査員にも不快な思いをさせてしまったと反省しました。さらに、調査員の質問票に対する理解度が足りず、seller と buyer を逆に認識していたり、選択肢をすべて読まずに誘導するような聞き方をしていたりしたのにも頭を悩まされました。1週間のパイロットを終えて回答率10%、調査員にも得られる回答にも不安が残るという状態で、本当に何もうまくいかない心が折れかけていました。

2月からの本調査にあたって、ウガンダでフィールドワークの経験がある人に相談し、様々な対策を講じました。まず、調査会社を変え、予算の範囲内で可能なインタビュー数が減ってでも調査員の質を確保することを優先しました。新しい調査会社では field manager と質問を1つずつ読み上げて意図を共有し、2日間の調査員トレーニングでは理解を問うクイズを行うなど、特に混乱しやすい質問について全員が正しく理解することを徹底してもらいました。また、質問票の内容も不信感を持たれないよう洪水に関連する質問とのバランスを調整しました。さらに、行政データのサンプリングの際に相談して、最新データと照らし合わせて高確率で現在も操業している企業を抽出してもらいました。調査員を派遣する際には、私と field manager で徹底的に住所を調べてリスト化します。例えば Facebook や Instagram のプロフィールページにある写真を拡大すると出てくる場合などもあり、自動化できず時間はかかりますが、道の名前だけでなく建物の名前・部屋番号までないと追跡できないのでこれがベストです。1週間の追加パイロットを通して質問票をさらに精査し、追跡マニュアルなども作成して無事に2月中旬から本調査に入りました。

私はもうポストンに戻ってきてしまいましたが、フィールドチームがしっかりと回しています。回答率も35%を超え、2週間で132社の調査を行うことができました。調査員も慣れてきているようで、少しずつ1日あたりのインタビュー数が増えています。まだ問題も山積みで目標の

500社に届くかは微妙なところですが、10月のパイロットに比べるとかなり状況は好転したと感じています。開発経済のフィールドワークはトライ&エラーの繰り返しで、何度も現場に出て失敗しないと上手くいかないのだと実感しました。バイクタクシーを乗り回しながらカンパラ中の企業を訪ね歩き、炎天下での探索で疲労困憊になり、時に睡眠不足になりながらの1か月間でしたが、どうにか上手く行ってほしいと願っています。



ボストンでお気に入りのランニングコース



カンパラの中心部